

モスリン

安部孝作

黄色の粒はどれも砕けた遺物なのだと、
大麦の粥はかきませられ、うずまき、
笑う、木皮のような皮膚の下には肉がある
老婆は、煤けたのではなく、浮き彫りになったのだ。
スープを欠けた淡色の皿に差し出してくれて、
一口を待つ。一口は、
とても呑み込める熱さではなかったけれども、
指先でも舌尖でも感じることはできなかった。
味を、まだ覚えているだろうか？ 十年後も。

——2004年9月の手帳、欄外

※

蜘蛛の巣がはりもなく、あちこちで切れていた。
手入れを怠って、かれていたチューリップの茎に、
すでに空き家になった建物が、緑に輝いていた。
ひねもす眠く、スポンジ、ヨーグルトを朝食べ、再び眠り、
ソファーから起き上がるのではなく、また沈み込む。
モスリンを敷いた背凭れ。純白の棘。獣の色と臭いを避らせる。

——2013年4月23日の手帳

※ 夕方

新聞紙が床に滑り落ちていた。船が傾いたかのように。

中東のI国（あるいはJ？ S？ 識別不可能）で遺跡が発見されたと聞いた。
それを話題にしていた彼は黄ばんでしまった。もうほとんど覚えていない。

※ 晩

なにがあったともいえない
どこにもあったともいえない、心のように。
生地（五千年前の古戦場で産出された、へ
タペストリーとかテクストとか、
紡ぐとか）、どのようにもたとえればよいが）
言葉みたいなごみで、覆われた

記事、写真、太陽が生み出した黒魔術――

「見よ、鋼鉄の羊たちが戦士を乗せ、迫っている！」

望遠鏡を構え、叫び、笑みを浮かべ、

白毛のヴェールを捲ろうとする、

風がさっと大鐘を鳴らし、

灰になったモスリンは埃となって消える。

刷毛から流し込まれるタールが影を

固め、浮き彫りにされる鱗の目、――

なにもうめられておらず、なにも

蔽われてはいなかった、描かれず、

ただ表面だけがあった、

影はなく、照らされた場所もなく、

ただ夢だけがあり、君たちの夢でしかなく、

さらさら砂は流れ続け、堆い山も、

塩辛い乳の流れ込む洞もまた流れる。

セラミックの遺跡、影に寝転がる犬たちの

毛の短い首に巻かれた布が、

白いままであることはない。

それは洗いたて、石鹸の香の消えぬうち、

またよごされるのだから。